

ON THE SPOT

現場から

●ダンス

第4回日本ダンス医科学研究会

去る3月2日、第4回日本ダンス医科学研究会がお茶の水女子大にて開催された。参加者は研究者、医師、理学療法士、アスレティックトレーナーなどの他にダンサーやダンス指導者が多く集まった。

最初に行われた教育講演では、勝川文憲氏（慶応義塾大学）による「ダンサーの内科的トラブルの対処法」という演題で、Female athlete triad についての話が中心となった。女性バレエダンサーは適正体重が非常に低いレベルにあるため、皆がこの体重を目指すには問題があるが、回避方法は基本的にはないというのが難しいところであり、さらにダンサーや指導者はこのことをよく理解し、無理に減量を行わないでほしいと続

けた。

その後はシンポジウム「国外で得たダンス医科学情報」、パネルディスカッション「日本人ダンサーをめぐる環境と課題」と続き、シンポジュストはそれぞれの立場から講演を行った。シンポジュストは整形外科医の立場から平石英一氏（永寿病院）、理学療法士の立場から浦辺幸夫氏（広島大学）、スポーツ科学者の立場から吉田康行氏（東京学芸大学）が講演を行い、パネルディスカッションからはプロダンサーの本島美和さん（新国立バレエ団）が加わった。

それぞれ第一線で活躍されている演者で、ディスカッションでは世界でも日本でもまだ発展途上の分野のため研究や論文はまだ少ないという内容のものや、ダンサーが知りたいことと研究者が知りたいことの差について議論された。今後もダンス現場をサポートするためにダンス医科

学が発展していくことを期待したい。

（阿部安浩／トライ・ワークス）

●学生トレーナー

第16回学生トレーナーの集い

3月12・13日、東京の帝京大学八王子キャンパスにて、第16回学生トレーナーの集いが開催された。

今年度のテーマは「井の中の蛙、大海を知れ」。田原良紀実行委員長は15回の歴史を踏まえた新しいことへの挑戦を掲げ、トレーナーがスポーツ現場以外にも活躍できる可能性があることを知ろうというユニークなコンセプトだ。

1日目のシンポジウムでは、フィットネスクラブやスポーツ用品メーカーだけでなく、スポーツ誌の編集者なども招かれた。「出版社の裏側」と題したシンポジウムでは、「Tarzan」の大田原透氏、「NEXT」の岩井智子氏、「Sports medicine」の清家輝文氏と各編集長が集い、取り組みを紹介した。三誌は対象とする読者層や流通スタイルなどがそれぞれ少しずつ異なるものの、スポーツに関する正しい知識を持ち、それを発信できる人材を求めていることは共通していた。質疑応答では、そういった人材や新しいトピックなどをどのように見つけるのかという質問が出て、これも「アンテナを張っておくこと、とくに人に会うこと」と三氏とも口を揃えた。文章をまとめるのも、人前で話すのもトレーナーは日々行っているはずなので、苦



ダンスにおける問題を、医科学の立場から考えていく

手意識を持たず発信していくことで新たな活躍の道が開けるのではないかと思えた。

また、「トレーナーと結婚生活」「トレーナーの金銭問題」といった、トレーナーとしての活動を充実させていくには目を逸らせないテーマについて、現在一線で活躍するトレーナーたちが率直に語った。とくに、食べていけるのか、税金はどのように納めればよいのか、もし訴訟のような事態が起きたら、と不安は尽きないもの。森部高史氏は「漠然としたままだと不安になる。判断力を持つ」と語りかけた。幸い、手本とすべき先達は多くいる。友岡和彦氏は「ボランティアはせず、ただしボランティア精神は忘れずに取り組もう」という責任感にあふれたアドバイスは、真剣な表情で聞き入っていた学生たちにとって頼もしかったことだろう。

さらには、トレーナーと活動フィールドが重なることが多い鍼灸マッサージ師、柔道整復師、理学療法士のそれぞれの資格を持つ泉重樹氏、小林直行氏、成田崇矢氏による「いろいろな視点からみた資格の活かし方」も興味深いものだった。視点を变えることで見えてくることはたくさんある。それを言えば、活躍できる場は日本に限ったことではない。「国ごとの違い——トレーナーをグローバルにみよう」というシンポジウムでは、アメリカでNATA-ATC資格を取得した多田久剛氏自らが座長となり、ドイツでスポーツフィジオセラピストの資格を取得した岡田瞳氏、ワーキングホリデー制度を活用してニュージーランドのラグビーチームでトレーナー経験を積んだ八木郁徳氏とともに、海を渡ったきっかけやそこから得たものを話した。岡田氏によれば、「トレーナー」とい



さまざまな分野からの講演が行われた。写真は松井健一氏



学生によるディスカッション

う肩書きから連想される仕事内容は日本とドイツとで大きく異なるという。また、八木氏のようにワーキングホリデービザを使うという発想を持つ学生はなかなかいなかったのではないだろうか。限られた時間の中でも、さまざまな気づきを聴衆に与えるシンポジウムであった。

そういったインプットを踏まえて、1日目の後半と2日目は学生トレーナー同士でグループを組み、活発なディスカッションが行われた。議題は「日本のスポーツを盛り上げるためには」。これはトレーナーがスポーツという広い分野の一員であることを改めて意識させるものでもあり、吸収した情報をコミュニケー

ションによって掘り下げ、理解を深めていこうというものだ。その熱気は懇親会でも変わらず、これからのスポーツ界やトレーナー界を担う学生側にも、それを引っ張り、ときには背中を押すトレーナーやスポーツ関係者にも、よい刺激となったのではないだろうか。

(北村美夏)

on the spot欄では、学会やセミナーなどへ参加していただいた様子を執筆していただいたり、最近の話題をニュース記事としてお届けしています。下記のメールアドレスへ情報提供をお願いします。
bhhd@mxd.mesh.ne.jp